第6回

「荻窪の記憶」こぼればなし

天沼の家

※このコラムをお読みになった方の中に、古い写真をお持ちの方がいらっしゃいましたら、荻窪地域区民センター協議会までご連絡ください。お借りした写真はテータ化したうえで、ご返却いたしますので、よろしくお願い致します。

天沼一丁目にお住いの木村昭子さんがお持ちくださった旧天沼二丁目にあったご生家の写真です。一方は本格的な西洋建築、もう一方は本格的な日本建築、一見別々の家に見えますが、実は一軒の家。和洋折衷が流行った戦前でも、こんな建築は珍しかったのではないでしょうか。建てられたのは昭和四年で、建築費は普通の家の十倍かかったといいます。

九人兄弟の末っ子だった昭子さんによれば、洋館部分には薪を燃やすマントルピースがあり、子供部屋にはベッド、クリスマスには鶏をオーブンで焼いたそうです。そんな生活ぶりからもうかがわれるように、一家は父上の仕事の関係で長くシアトルで暮らしていました。しかし、昭子さんが生まれる前に、一家は東京に住むことになります。鹿児島の出身で東京をよく知らなかった父上は、すでに四人の娘がいたので、「女の子を育てるのに良い環境」を条件に土地を探したそうです。下見した土地のなかには、田園調布もありましたが、なぜか、「女の子を育てるところではない」と判断し、天沼を選んだのだといいます。

当時、家の周りには麦畑や林が残り、近所にあった馬小屋のある陸軍の官舎には、「満蒙のロレンス」と呼ばれ、陸軍大臣になった土肥原賢二が住んでいたそうです。

「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男